Osaka University Knowledge Archive

Title	＜紹介＞伊井春樹著『小林一三の知的冒険　宝塚歌劇を生み出した男』
Author(s)	福田, 涼
Citation	語文. 2017, 108, p. 111-112
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71015
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

紹　介

伊井春樹著『小林一三の知的冒険　宝塚歌劇を生み出した男』

福　田　　涼

小林一三といえば、阪急グループの創始者であり、また宝塚歌劇団の生みの親として広く認知されている。一方で、書題に「知的冒険」と銘打たれた本評伝が開示するのは、実業家としての小林ではなく、従来あまり知られていなかった「文化的な世界に生きた人間小林一三」（二百四十頁）の実像である。まずは章ごとにタイトルと大まかな内容を紹介することで、本書を概観したい。

「一　韮崎小学校から成器舎へ」では、新出の日誌や出納帳、後年に記された未発表の随想などをもとに、少年期の小林の姿が活き活きと描き出される。実孫のように小林を愛した大叔母・房子との交流（小林の長男は彼女に因んで富佐雄と名付けられた）は、彼の人となりに大きな影響を与えたという。

「二　東京での新生活」は、主として慶應義塾時代の小林の活動を伝える。現存の三田演説館が象徴するように、彼の入塾当時は、各地各所で演説が熱く繰り広げられた弁論の時代であった。各種の演説会や機関誌の編集に勤しむ充実した学生生活の実態が示されている。

「三　小説家の夢」は十七歳のときに「山梨日日新聞」に連載した「練絲痕」（明治二十三年）を嚆矢とする彼の旺盛な小説執筆活動に光を当てる。慌ただしい銀行員生活を送りつつ、小林は小説家への夢を失わなかった。小説が掲載された媒体や人脈の問題を含め、従来の近代文学研究が見過ごしてきた一連の鉱脈が発掘されたといってよい。一文学青年の成長史としても示唆に富む。

さて、小林は草稿を含めると三千句ばかりの俳句をつくったという。和歌や漢詩、狂歌の類も数多く残されている。これらを踏まえ「四　俳句への傾倒」は、学生時代から戦後に至るまでの彼の人生を、俳句を切り口として描出してみせる。原爆句の切り抜きに関する逸話には殊に心を打たれた。小林の「文学を愛し、芸術をこよなく楽しみ、人を大切にした精神」（百四十一頁）が感じられる一章である。

「五　「上方是非録」による大阪文化」では、筐底に残されていた未発表の小説原稿に対して実証的な分析が施されている。箕面有馬電気軌道株式会社を創立した後に書かれた「上方是非録」は、芸妓の生きざまや大阪の風俗を描く小説として企図されつつ、小林自身の体験や都市論が如実に反映されてもいるという。

こうした「習作」の存在が、「六　『曾根崎艶話』の執筆」にて論じられる『曾根崎艶話』の出版へとつながったと著者は位置づけている。芸妓論や花街論、あるいは都市開発計画までもが織り込まれた「上方是非録」に対し、本作では物語としてのテーマ意識がより明確に打ち出されることとなった。本書は大正五年に籾山書店から刊行され、戦後には「紅梅の蕾」を付加した再版本が出版されている。紙幅の都合上、詳述することは叶わないが、戦後版の刊行をめぐる錯綜した事情については、たしかにあれこれ

と「考えをめぐらしたくもなってくる」（百九十三頁）。戦禍を免れ得ず焦土と化し、また次第に失われてゆきつつあった大阪の花街への哀惜の念が、戦後の再版につながったという。

「七　文化人との交流」では、主として絵画や俳画帳の蒐集など、小林の風流人としての側面が浮き彫りにされる。新進・中堅の画家のパトロン的組織「鼎会」に関する記録は、美術愛好家と画人との交流のありようを伝える貴重な資料である。また小林は、私淑の対象であった尾崎紅葉が田山花袋との合作として発表した翻案小説『笛吹川』（明治二十八年）の原稿の半分を所有していたという。このほか俳幅や俳画帳のコレクションへの言及を介して、文化人たちの交流の様子が詳しく述べられている。

終章にあたる「八　果てなき文化への希求」は戦中ならびに戦後、そして晩年の小林の動静を物語る。第二次近衛文麿内閣の商工大臣など国政の要職を歴任。昭和二十一年三月に公職追放の指定を受け、五年後に解除となる。政治の表舞台から退き美術や茶道の世界に耽溺する一方で、架空の翻訳小説の執筆を試み、あるいは劇場の設立や映画の制作へと乗り出してゆく。文化への飽くなき憧憬を抱き続けた小林一三の八十四年の生涯は、昭和三十二年一月二十五日に幕を下ろすこととなる。

以上の拙い要約からでも了解されるように、本書では小林一三の文化的な営為を辿ることに主眼が置かれつつも、つねにそれぞれの時期や時代における社会や文化、風俗のありようにまで目配りがなされている。企業経営者としての小林一三が世の趨勢に敏感であり続けたことは周知のとおりであるが、こうした姿勢は彼の「知的冒険」においても貫徹されていた。小林を語ることで時代の層が浮き彫りとなり、また時代を語ることで彼の文化的な諸活動がより明確に意義づけられてゆく。

著者自身も記しているように、多面体である小林のすべてを一書にまとめることは容易でなかろうが、本書においては、小説にしても俳句にしても、彼の企業人としての側面との有機的な接続がはかられている。章を追うごとに各所の叙述や考証が輻輳され、一個の人間としての小林一三の姿が立体的に塑像されるのである。新資料に基づく考証によって先行の評伝や年譜の補填や訂正がなされた箇所も少なくなく、また著者の典雅で滋味深い文章も本書の魅力のひとつとなっている。

『曾根崎艶話』について、これと版元を同じくする永井荷風『新橋夜話』や『腕くらべ』との比較も夙になされており（柏木隆雄「小説家小林一三の位置――荷風『新橋夜話』から『腕くらべ』を結ぶもの――」、『文学』第十六巻第二号、平成二十七年三月）、このほか文体の変遷や田山花袋との間接的な接触の実態など、本書が紹介する逸話や作品、資料の類は更なる関心や議論を引き出してゆくことであろう。

小林一三の生涯を通じた「知的冒険」のありように鋭く迫る本評伝は、新たな「知的冒険」への誘いの書にほかならないのだ。

（本阿弥書店、二〇一五年六月、二四一頁、二〇〇〇円＋税）

（ふくだ・りょう　本学大学院博士後期課程）